

「夕顔」を歩く

京都市下京区に夕顔町という地名があります。地下鉄烏丸線四条駅から南東へ徒歩十分ほどの場所です。能「夕顔」は『源氏物語』を出典としていますが、物語は架空のお話であり、能の主人公・夕顔も実在しない女性です。能の謡躰めぐりでは、時々、事実と物語が混同したり架空の史跡が残っていたりします。山姥や妖狐などの小さな石碑をようやく見つけた時などは、その碑ができるまで長い時間、沢山の人のよって語り継がれた物語の歴史を感じるものがよくあります。今回の能「夕顔」で訪れた夕顔町は、「都」の真ん中、何百年も前から人々が町の名前として受け継ぎ、住まい、物語と生活が自然に溶け込む温かさが伝わる謡躰でした。

碁盤の目のようなといわれる京都の通りですが、京都の人はたいてい、通りの名前をわらべ歌で覚えます。「姉さん六角たこ錦（姉小路通・三条通・六角通・蛸薬師通・錦通）　しあやぶったかまつまん五条（四条通・綾小路通・仏光寺通・高辻通・松原通・万寿寺通・五条通）」といった具合です。夕顔の碑が残る夕顔町は高辻通と松原通の南北の通り、柳馬場通、高倉通の東西の通りに囲まれた辺りで、京都の市街地の真ん中にあります。静かな夕顔町の個人のお宅の塀際に「源語傳説 五条辺 夕顔之墳」の石碑が建っています。京都では昔からの町並みが残る地域では、通りをはさんで向かい合う家同士が一つの町を形成している場所が沢山残っています。平安京の時代から現代まで、長い時代を超え、いくつの変遷を経た町の形で、両側町と呼ばれている時代には防衛のため、時代が落ち着いて商業が盛んになると商業地として、そして今でも、両側町が自治基盤の基盤となって、向かい側同士でひとつの町を作ることによって家々が密接に結びあっているのを感じました。

夕顔町を南にほん100メートルほど下った所で、偶然、能「鉄輪」の謡躰を見つけてきました。注連縄が張られた門をくぐった路地の奥、民家と民家の間に小さな祠と鉄輪の井戸がありました。

さて、夕顔町から歩いて十分ほどで五条通りに出ます。夕顔が光源氏と一夜を過ごした「何某の院」の史跡は、河原町五条で目と鼻の先、四車線の大きな通りに義経（牛若丸）と弁慶の像が建つ河原町五条通りの南側、高瀬川のほとりにその史跡がありました。夕顔町、鉄輪の井戸、河原院と三十分もあれば物語りの世界を旅することができます。京都は中世の物語の宝庫といえましょう。

平成二十四年 長月吉日

廣田幸稔



↑夕顔町の民家の軒先で咲く、夕顔の花（PM6時過ぎに行きました）
→「源語傳説 五条辺 夕顔之墳」の石碑



↓「夕顔町」防火バケツ



↑夕顔の花があちこちに咲く夕顔町の町並み。通りの突き当たりは五条通り
←能「鉄輪」史跡 門をくぐると路地の右手に鉄輪の井戸がある



↑源融の住居「河原院」碑

←五条通り真ん中の緑地帯に義経と弁慶の像、正面は東山、「河原院」跡は五条通り南側

